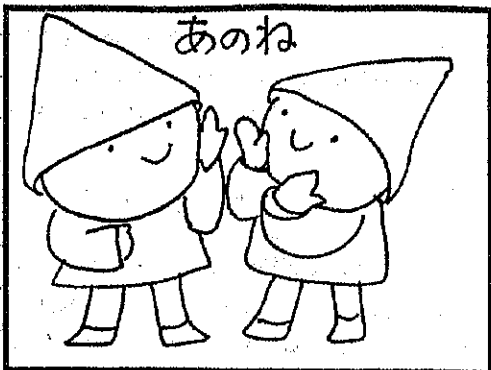


特別支援だより No.15

令和3年7月26日（月）

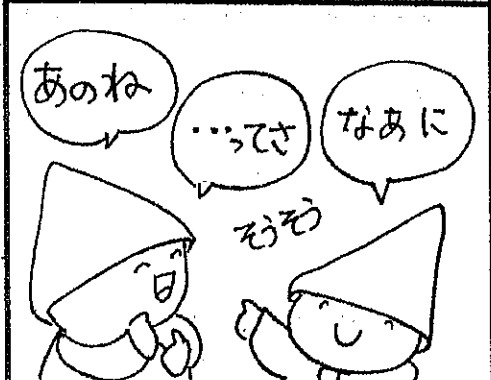
特別支援教育コーディネーター 松田敦子

① 「あのね」という心のメッセージ



子どもには、いつも誰かに伝えたい「あのね」があります。大人も同じかもしれません。自分の気持ちを誰かに伝えたい、すぎなあの人に聞いてほしいと思っているのです。

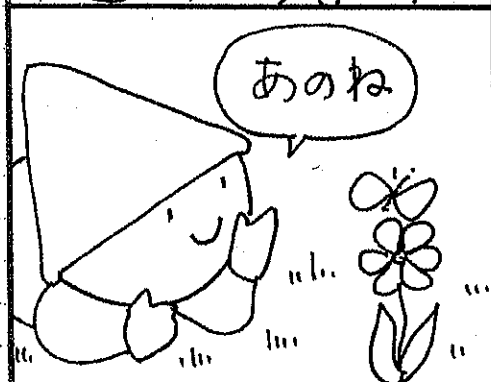
ですから、「あのね」ではじまる言葉は、自分の存在を認めてほしい、好意をもつてほしいと思って発せられるのです。そして、子どもは「あのね」の言葉のあとにつづく「真意」を先生に聞いてほしいのです。先生との間に「あのね」といえる関係づくりが求められているのです。



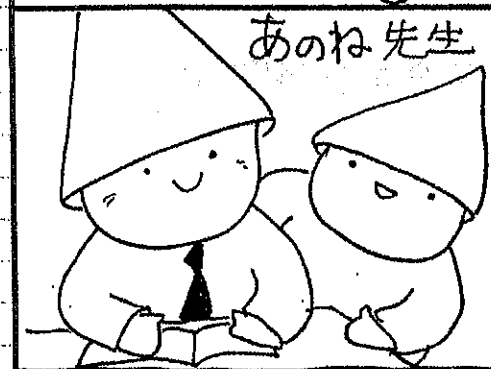
4月当初、1年生が校門の前で、泣いています。泣きじゃくって言葉になりません。そんなとき、「どうしたの？」とたずねるだけではなく、先生の方で「あのね…」と、きっかけの言葉を投げかけると、子どもは続けて「あのね。今日ね。…わすれものしちやったの」と不安な気持ちが伝えやすくなります。

「聞いてもらえた」ということは、子どもにとって、この上ない「安心」が伴うのです。その上で、子どもの「あのね」のあとの真意や背景を受けとりましょう。

子どもから「先生、あのね」といっていろいろ話してくれたら、もう互いに「すきだよ」という関係ができたのと同じです。そして、子どもに「先生も、大すきだよ」と言葉や態度など全身で伝えることです。



学校が一人ひとりの子どもにとって、心の居場所になっているかが大切です。「あのね」は、心の居場所を確かめる営みなのかもしれません。



「大すき」といえる関係づくりをしっかりと。

Q7

よく、ボーッとしていたり、何もしないで立ちすくんでいることがあるのですが…

自閉症児は、何かを見つめてボーッとしていたり、何もしないで立ちすくんでいることがあります。注意散漫に見えることもあります。

自閉症の特性から考えてみましょう

- ① 自閉症の子どもは、周囲の状況に関係なく漠然と宙を見つめてそのまま止まってしまったり、目を細めて何かを凝視して、自分の周りのことに全く注意が向かないことがあります。これは、自閉症児によくみられる行動です。(音も聞こえていない様子で、肩を叩かれるまで気づかないこともあります。) このような行動が、診断のきっかけや決め手になることもあります。
- ② 上記の行動は、視覚的に好きなもの(きらきら光る物や、くるくる回る物のことが多い)が目に入ると見つめてしまうという自閉症児によくみられる行動の一つで、自分自身ではコントロールができないことが多いようです。しかし、その場で起きている苦手なことから逃避するために行っているような場合には、特別な配慮が必要ことがあります。
- ③ 授業中、ボーッとされていて教師の話を聞いていないように見えるのに、廊下から聞こえてくるちょっとした物音に反応して廊下へ走り出してしまうことがあるような場合は、授業中の先生の話よりも他から聞こえてくる物音に注意を奪われていると考えられます。自閉症児は、目的以外の種々雑多な刺激を取り込まないようにすることが難しいために、その場で注意を向けねばならないことに集中できない場合があります。
- ④ また、教師の指示が具体的にでなかったり、状況が異なったりすると、何をすればよいのか分からなくてその場で止まってしまふ(これを、フリーズすると言います)ことがあります。

支援のヒント1 自閉症児への指導例

小学校3年生の知的障害を伴う自閉症の男児。学習中ボーッとしていたり、急に教室の外へ出て行こうとします。このような場合、支援の方法として以下のようなことが考えられます。

- ① ボーッとしている理由が、授業内容が合っていなかったり、何をしたらよいのか分からないことにあると考えられる場合は、(保護者と相談の上で)子どもの発達レベルに合った学習教材を別に準備してみる。
- ② ボーッとしている様子がみられたら、子どもの前面から、名前を呼ぶ、体に触れるなどして、子どもの注意を向けさせる。体に触られることに抵抗がある子どもの場合は、注意を向けるためのサイン(例えば、机を軽く叩くなど)をあらかじめ決めておくといった配慮をする。
- ③ 急に外に出てしまうような時は、その時にどんな音がどこから聞こえていたかを記録に取ってみる。例えば、廊下を誰かが通った音がすると飛び出してしまう、といったことを記録することで教師が状況を理解することができる。つまり、そのような行動をする時には、必ずはっきりとした原因があるということ、まず理解することが大切。廊下を誰かが通った音に反応して飛び出す場合には、廊下を通った人や音の正体が分かると、すぐ教室に戻ることもある。

支援のヒント2 高機能自閉症・アスペルガー症候群の児童への指導例

小学校5年生の高機能自閉症の男児。教師がチェックを終えたノートを皆に配る仕事を頼まれたのですが、ノートの持ち主がいなかったため、どうすればよいかわからない様子で立ち止まったままでした。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ④ 抽象的な表現が理解できなかったり、臨機応変な状況判断が苦手な場合が多いので、より具体的な指示を出す(例:「ノートを返して」ではなく、「ノートを机の上に置いて下さい」と言う)。
- ⑤ 混乱の原因にもなるので、一度にたくさんの指示を出さない。
- ⑥ さまざまな状況や場面に合わせて、指示内容や手順を具体的に分かりやすく書いて渡す。場合によっては、視覚的な手がかりになる目印を決めて、分かりやすくする工夫が必要なものもある。
- ⑦ 言葉で指示するだけでなく状況や理由を詳しく説明することで、仕事の内容が理解でき、実行しやすくなることもある。例えば、宿題のノートならば、「朝出したノートを、帰るまでに返せばいい」ことが分かれば、必ずしも「今」渡さなくても「後で」渡せばよいことが理解しやすくなるなど。